

「神の愛」

どうか、主が、あなたがたに

神の愛とキリストの忍耐とを

深く悟らせてくださるように。 II テサロニケ 3:5

イエス様を見ていると、神様の愛が見えてくる。目に見えるものがすべてだと思っていたのに、その見えるものの背後に、神様の愛が大空のように限りなく広がって、すべての現実も、実はその愛の中にあるのだとわかってくる。

先日、徳島で四国集会があり、北田さんの伴奏、奥様の指揮で、みんなで「ふるさと」を歌った。お年寄りを訪ねると声を合わせてよく歌う歌なのに、今回は ♪うさぎ追いし かの山 こぶな釣りし かの川♪ と歌い始めると、幼い日に遊んだ土手の草や、そこを吹いていた風や光が思い起こされて、あんな幼い頃から神様に愛されていたのだと涙が溢れてきた。この世での人の境遇は決して平等ではない。でも、両親や家族から愛情いっぱい育てられる子供も、生まれた時から施設で「僕にもお母さんっているの？」と問う子供も、目に目える状況は一人一人違って、みんなみんなこの神様の愛に包まれて育てているのだとわかって、ますます涙が溢れた。そして3番、♪志をはたして いつの日にか 帰らん 山は青き ふるさと 水は清き ふるさと♪ と歌ったとき、ああ私が帰っていく天国とは、想像もできないような光り輝く世界ではなく、谷川がさらさらと流れ、緑の木や草がそよ風に揺れて光っている、あの素朴な単純な世界かもしれないと、ふと思った。

マタイ福音書 18 章に「『仲間を赦さない家来』のたとえ」というのがある。ある家来は王様に1万タラントンの借金があり、それこそ首をくる他ないほどの額なのに、憐れみ深い王様はそれを全部赦してくださった。ところがその家来は、仲間に貸した百デナリオンも赦さず、仲間を牢に入れたので、そのことが王様の耳に届き、結局、家来も牢に入れられてしまう、という話である。王様は神様、家来は私たち。このたとえのポイントは「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう」という、赦しの大切さであるが、

このたとえを読むたびに、特に印象的なのは、その借金の額の違いである。塚本訳では 1 万タラントンは3百億円、百デナリは五万円。私たちは、神様には三百億円の借金(罪)をがかりそれに比べると人に借していても、それは高々五万円。赦しの大きさは愛の大きさである。私たちは神様から無限大の愛で愛されており、人の愛(五万円)をどんなに寄せ集めても、神様の愛のひとしづくにも足りないというのである。この世で良い家族、良い友人といっぱいいっぱい恵まれ、人から羨ましがられても、その愛の額はせいぜい百万円ほど。この世では不運の連続であってたとえ人から愛されたことがない人がいても、神様の無限の愛を知ったら、すべての嘆きは吹っ飛んで、自分こそ世界一の幸せ者だとわかるだろう。神様の愛の結晶であるキリストの十字架と復活こそ、わが喜びの全てでありたい。

---

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。

そのことによって、わたしたちは愛を知りました。」ヨハネの手紙13:16

ほら、車で走っていて、ちっとも信号にかからないで、青、青、青ってこともあるように、今日は何と祝福された日だろうと思うほど、ぐんぐんうまくいく日がある。ところが、少し走れば赤、また赤、ついてないなあって思う時があるように、その日はついてない日のはずだった。

肩はこるし疲れてるけれど、今日しかないといさんを訪ねて、車椅子を押して買い物、家々のお花を見ながらの散歩。1 時間ほど歩き続けて、公園でハトにエサをあげて、一緒に十分楽しんだと思っていた。後はお部屋に帰って、手をとって祈り合い、「じゃあ、また来月」と言えば、「ありがとう。運転気をつけてな、主人によろしくな」と見送ってくれて、青、青のはずが、老人住宅に帰って隣の人に出会うと、いさん「コイツはアホやで、ほんまにイヤなヤツや、アホや」と言った。「アホ、バカ、嫌なヤツ」は確かにいさんの口癖だったけれど、訪ね始めて5年、10年と経つうちに「あいつアホや、でもアホって言うたら、あんたが嫌がるから言わへん」と照れ隠しに笑うようになっていたのに、この赤信号はいったいどういうこと。あまりにもがっかりして、それでもいつものように祈り合っの帰り道、これはどういうことかと考え続けた。

人は心が満たされない時、不平や不満を言い悪いことが目につく。でも、愛で満たされていると

きは、何もかもよく見えるものだ。だとすると、今日の散歩を楽しんだのは私だけで、Iさんの心を満たすことはできなかったのだろうか、いや、「ありがとう、ありがとう」と嬉しそうにくり返す彼女の言葉に嘘のあろうはずもない。だとすると、Iさんは楽しい時を過ごしても、なおも人の悪口が言える人なのだ、とため息をつきそうになったその時。「わたしはあなたのために命を捨てた」とイエスのお言葉に、はっと気づいた。私だって、イエス様にこんなに愛されているのに、まだ不足があるかのように文句をいうではないか。人の欠点や間違いが大きく見えて、口にしてしまうことだってある。ああ、あのIさんの姿は私自身なのだ。どんなに愛されても、どんなに満ち足りても、なおもイエス様のご愛を踏みにじってしまう。こんなIさんや私に「それでも、わたしはあなたを愛している」と言ってくださるイエス様のご忍耐を思って、涙がにじんだ。「アホや、イヤなやつや」の赤信号は、こんな私たちを愛し続けてくださるイエス様の血潮の色だった。

青、青、青の日はうれしい。どうしてこんなに祝福してくださるのですかと、賛美と感謝は自ずとあふれる。でも、この私が本当の自分を知るために、罪赦されなければ今日という日を喜んで生きることさえできない者だと知るために、神様は赤信号を備えていてくださるのだ。赤を無視して前進すればきっと大事故になる。赤だと気づけば立ち止まって、「わたしはあなたのために命を捨てた」と、愛のみ声を聴かねばならない。そうなのか、イエス様の愛に立ち返るための赤信号、ならば、赤、赤とついてない日もまた、祝福に満ちた日なのだと、うれしくなって目を上げれば、

♪ほむべきかな 御名によりて 受くればものみな 良からざるなし♪(新聖歌 174)

との賛美が、天にも地にも響きわたっていた。